

別府風多文化共生のあり方 Beppu Style Multi-Cultural Life

安部 純子(別府市役所 文化国際課)
Junko Abe (Beppu City Hall Cultural and
International Affairs Division)

キーワード 別府温泉文化、留学生、別府国際観光温泉文化都市、受入れる、平等、世界恒久平和

1. 温泉観光の街別府が日本一留学生と共に住む街になった。

現在別府は、人口が約12万人であり、その中に世界約80カ国の国や地域から集まった留学生約3,200人と共存する別府市は、平成21年の調査で、人口当たりの留学生数が全国平均の26倍で群を抜いて1位であることがわかった。地方の温泉観光で成り立っていた別府市がこの環境に至る経緯として、1980年代の日本の経済が勢いを落としていく時期に国内有数の歓楽地として栄えた別府も例外とはならなかった。港に船がついては賑わっていたかつての姿はどこにもなく、街はシャッター通りが目立ち地域の再生を模索するなか、過疎問題、雇用の創出、定住人口減少も食い止められると同時に交流人口の拡大も図ることができる方策として大学誘致が進められた。反対する者もない訳ではないが、あまりに衰退していく街の変化を見るなかで、2000年に学生の半分が留学生という国際大学が開学した。全てが手探りの中から10年以上が経過し、新しい文化や価値観を持ったニューカマーと地元の間が共存する姿、別府らしい共生のなかで意欲的に活躍する留学生と心から受け入れる地域のつながりがこの街に存在するようになった。

2. 別府という場の持つ性質・異なるものを「受け入れる」感覚

別府は日本一の湯出量を誇り、温泉は観光サービス産業として経済の基盤資源であり、古くは湯治客など戦後には傷痍軍人や、当時受入れてもらえなかった被爆者達の治療所としてなど医療としての利用もあるが、やはり根本は温泉が市民の生活の中心にあるということである。温泉という大地の恵みから受ける恩恵は誰のものとか決まっていない。これはだれでも受けることのできる自然の慈愛である。何人であるとか、身分の階級とか、どれだけの数字が預金通帳にあるとか、全く関係なく全ての人が享受することが許されている。大地から祝福された豊かな恵みをみんなで分かち合う。別府温泉の前では皆平等という意識が基本的な精神として潜在的にあり、身に何もまとわない状態で毎日他人とふれあい交わる日常がいまだ存在する。プライベートとパブリックの境がとても低く、昔から「よそもん

が集まってできた街でもある。戦後米軍キャンプが街の真ん中に駐留していた時は、米風文化を楽しんだり、語学を習得し現在でも外国人観光客案内の通訳をしている方もいたり、どんな環境も上手に受け入れていく。同じぐらいに満州や朝鮮半島からの引揚げ方々が生活を始めるのもこの街は常に受け入れてきた。別府にはどんな異質のものでも受け入れ、湯で癒し、水に流すという独特の文化がある。

3. 別府風温泉文化 混ざり方の注意

一昔までは混浴温泉に浸かり、最近でも国内は元より海外のお客様をおもてなししてきた街であり、新しい流れが生まれる時の最初のベクトルの方向の持って行き方さえ誤らなければあとは、問題が起きてもよい方向にことを流せる技量を持っている。日本は島国であるのであまり生れてからの環境や言葉が違う方達と共に暮らすという経験をするのがないと思うが、別府は常にそのような環境にあったのでとにかく、街は全てを歓迎するという姿勢が定着している。世界の歴史を振り返ってみて新しいものが侵略してきたり、訳あって祖国を離れている者達は常に不平等な社会が待っていたり、苦しみや悲しみなどつじつまの合わないことばかりしか待ち受けていなかったが、別府では出来る限りそのような「人が悲しむ」環境をつくらぬよう努力している。例えば、国際大学の開学にあたり、行政や市民団体が何年もかけ住民と話し合い理解を求め繰り返し話し合いを開き、最初の国際学生の空港お迎えを、市民ボランティアで行い家族を迎えるように遠い国から単独で来る期待と不安を抱えた若者を支えようと奮闘した。このようなやさしい努力をこの街は数えられないほど継続的にしている。

現在日本における外国人の受入れが活性化している半面、彼らが実際に「生きる場」となる地域での受入れ体制が整っているのか、またその形が安定して継続しているかと言えば、正直なところまだ不安定な部分も多い。しかし、別府は現在も留学生やその家族などの受入れは可能な限りで各受入れ団体が最善を尽くしその改善をやめない。この街の全てをやさしく包もうとする姿勢には、もとからある性質とはいえ感謝せずにいられない。

4. 「留学生」地域交流のかたちづくり「知的財産」の活用

具体的に、留学生の地域参加としては、地域のお祭りの参加や高齢化してきた街の活動へのボランティア参加など様々である。その他、留学生には更にまちづくりや別府の観光の発展のためにワークショップに参加いただき実際モデルになって観光産業の立て直しに貢献していただいたり、言葉の壁や文化の違いなどを超えて広くに活躍していただいている。日本に来て言葉や文化の壁で社会的弱者の存在になる傾向があるなか、在住外国人の方々にも地域での居場所、出会いのきっかけをたくさんつくるように日々奔走している。特に定着している活動として年間を通して市内小中学校に出向き国際理解教室の講師をしていただいたり、市民向けの国際交流教室も開催していただいている。文化交流では、料理教室や民族文化の発表など、大きなイベントだけでなく日常としての小さなイベントの継続にも赴きを置いている。その中で市民と外国の方が重ねて行く経験や思い出が私達の財産となる。別府にいながらにして世界の人達の文化を理解する機会があることは、将来を担う子ども達の未来への大きな投資である。別府にとって留学生にとってお互いが必要としあう存在となっている。

5. 命の価値の理解 — 別府に居住をおき、実際にその街の住人と同じ生活をしている外国人に、できる限り住民と同じ公的サービスを受けるよう、多言語情報の提供、日本語クラスや、日本文化理解教室など交流できる環境をつくり、教育、育児、医療など外国人だから私達に関係ないと思わせないようにベストを尽くす。全ての命は祝福されている。どの命も尊い、命に優劣はない。社会がお互いの感情や生活に無関心ではないことと、全ての命を大切にす姿勢を理解してもらう。これまでに生まれた様々な葛藤、問題はその場で解決する。お互いの宗教にも敬意を払い価値観の相違も真摯に受け止める。表面的な形にならない様に細心の注意をする。これは、災害時の防災にもつながる。また、卒業した後も、別府を第2のふるさととして応援してくれたり、信頼の上でつながっていくことにもなる。

6. ■ みんなの笑顔と世界の未来 — どんな小さな声でも聞く姿勢を保ち続ける。世界各国からの留学生とその家族、関係者がご縁あって別府の住民となったので、この御縁を世界によい形で広げていきたい。先日の震災の後、留学生達が、風評被害に苦しむ方達のために **Blog** や **SNS** などを通して、日本の安全性を呼び掛けてくれたり、お互いを思いやる丁寧な形の取り組みでやさしい関係づくりを常にしている。このつながりが未来のみんなの笑顔、世界平和への希望となる。

別府市は、広島の平和記念都市・長崎の国際文化都市建設法の設定につぎ、昭和25年に、国際観光温泉文化都市に指定されている。

別府国際観光温泉文化都市建設法(昭和二十五年七月十八日法律第二百二十一号)

(目的)

第一条 この法律は、国際文化の向上を図り、世界恒久平和の理想を達成するとともに観光 温泉資源の開発によって経済復興に寄与するため、別府市を国際観光温泉文化都市として建設することを目的とする。

この法律を制定するとき、住民投票をし、みんなの意見で別府という街の性格を形作っていった。温泉を始めとする豊富な観光資源を、時代によってその解釈・活用は変化しても現在も人と人とのつながりを生み出す場、心と体を癒す場として存在している。この自然環境の恵みがこの街の「異質を受け入れる」文化、性格を形成している。

<別府市民憲章>

- ・美しい町をつくりましょう
- ・温泉を大切にしましょう
- ・お客さまをあたたかく迎えましょう